慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	板倉卓造著 欧洲戦乱の真相と交戦列国
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.10 (1914. 12) ,p.1360(132)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19141201-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

板倉卓造著『歐洲戰亂の眞相と交戰列國』

大正三年十一月慶應義塾出版局發行
四六版一六二頁定價金六十五錢

本書は歐米の外交に精通せらるゝ板倉教授が歐洲戰亂の頗る錯綜せる近因並に遠因を簡略に説明する爲めに著はされたるものなり。著者は冒頭今次大混戰の近因なる墺地利皇太子横死の實況に筆を起し、進んで此事件に依りて誘致せられたる墺塞兩國の衝突が延ひて獨國をして蹶起せしめたるの逕路を叙述せる後、轉じて戰亂の遠因なる塞墺、露獨の確執の眞相を明かにし、更に轉じて塞墺兩國間の問題に關して獨逸帝國が佛露に對して挑戰するに至れる理由を擧げ、次に外に向つて平和的外交を事とし内に於て愛蘭土問題の爲め將に内亂の淵に臨まんとしつゝありし英帝國が自國の安全を維持せんが爲め遂に白佛を援助するの餘儀なき羽目に陷ゐれるも、而かも英國が一度びを助く可しと明言せば獨は直ちに其彊暴なる態度を改めて塞墺折衝の調訂を試むに至る可しとの佛國外交家の慫慂に對して英外相グレー氏が最初言を左右に託して明言を避けたるの一事は獨をして英に戰意なきものと誤斷せしむるの結果を呈したるものなるの事情を指摘し、更に飜つて白國民の勇敢なる抵抗と其決心を稱譽し、再轉して佛國民が獨軍侵入を物ともせず擧國一致して防禦是れ勉むるの狀態を叙述せる後、北海に於ける英獨海軍の勢力並に伊國の中立問題に論及し最後に露英に戰意なしと誤信し且つ白耳義の國防を蔑視して必勝を期しつゝ干戈を動かしたる獨逸は必然戰敗の運命に遭遇す可く、而して、獨逸が事毎に斯く判斷を誤りしは萬事を親裁せんとせる脱線君主カイゼルの專斷政治の罪なりと論じて卷を結べり。

本書は四六版百六十頁を數ふるに過ぎざる一小冊なると同時に稀に見る流暢なる口語躰を用ひたるが故に、之を通讀せば二三時間の中に一見捕促し難き複雜なる戰亂の原因を知悉することを得可し。

廣告

理財學年々報

◎ホイットナック教授歡迎會　本理財學會はレー教授の後任者としてホイットナック教授の來塾ありたるにより茲に十月二日（金曜日）其の歡迎會を三田東洋軒の樓上に開き席上本會幹事齊藤氏は本會を代表して歡迎の辭を呈す次でホイットナック教授の答辭ありこれにて宴を閉ぢ一同談話室に入りて午後十時頃散會す、本日は例の如く塾長始め諸教授並に幹事諸君の出席ありて頗る盛會なりき。

◎理財學會秋季大會　第六十九回理財學會秋季支會は十一月十四日午後一時を以て三十二番講堂に開催せり「生憎曇天なりしにも不拘聽衆極めて多く滿場立錐の餘地なし、定刻に至るや堀江教授は「歐洲戰時の財政政策」なる演題の下に得意の快辯を振はれ自佛獨露が開戰後一齊に兌換の停止を爲せるは原始時代に逆戻せるものなり、此間に獨り英國が其停止を爲さず正貨準備の漸次增しつゝあるは賞贊に値すとなし、我國に及す影響に就いては外貨輸入の絶望なる所以を説き實本的に獨立せざる可らずと切論せられたり、次に『財政經濟時報』主幹本多精一氏は「我國現時の經濟政策」なる演題を掲けて我國の元老大臣並議員等が經濟上の常識に缺乏せることを痛罵し、在外正貨の不條理なる事を説き、國產奬勵を論評し外品輸入は却て內國產業を刺戟するものなれば大に歡迎に値すと論じ、次で帝國大學教授河津博士は「戰亂と商權の推移」と題して今回の戰亂は英獨間の商權の爭より發生せるものなれば他の諸國が之に參加するは愚なり、英國が新進の獨逸を壓伏して從來の優者たる地位を保ち得るかは興味ある問題なりと滔々數千言雄辯を振はれ、次に我國實業界の耆宿澁澤男爵は「國產奬勵に就いて」と題し國產奬勵の意義が往々世上に外品防遏と誤解せらるゝも決して然らず我國にて振興し得可き見込ある產業を此際大に發達せしめんとするに外ならず、元來我國には舶來品を過度に尊重する惡風あり斯の如き氣風は撲滅せざる可らずと論じ、最後に正金銀行の小田切萬壽之助氏は「日本及支那の貿易差額に就いて」なる題下に日本と支那との輸出入を比較論評し、我國は支那に比して良好なる狀態にあるも大に輸出の奬勵增加によりて債務國たる域を脱せざる可らず、外貨輸入に關しては隱健なる反對論を試み印度支那方面に貿易の發展を計らざる可らざる所以を論じ、喝采場裡に降壇せられて、無事閉會す、時に午後五時三十分。閉會後堀江教授並びに各教授を中心として新嘗の幹事打寄り晩餐會をピッカスホールに開催し歡談を盡して午後十時半散會せり。